平安時代における『無量寿経論』テキスト

――天台浄土系論書よりみて――

辻本俊郎

一、『無量寿経論』テキストについて

世親著・菩提流支訳[1]『無量寿経論』（『往生論』、『浄土論』、『無量寿経優波提舎願生偈』などともいう。以下、『論』とする）は、曇鸞（西暦四七六～五四二年？）によって註が施された。すなわち『無量寿経論註』（以下、『論註』とする）である。その中には『論』の全文を引用されていることはよく知られている。しかしながら、『論註』より『論』本文を抽出し、『論』本文との比較を試みたところ、字数はもちろんのこと、字句の異同が甚だしく、文意も大きく異なり[2]、『論』テキストの伝播状況として『論』系と『論註』系の二系統に大別されるのである。

そこで、『論』と『論註』所引本の『論』との主な異同についていくつか眺めて見よう。ここでは便宜上、「大正大蔵経」所収の『論』と対比させ、頁数も「大正大蔵経」二十六巻のものである。

（表①）

大正大蔵経	『無量寿経論註』
梵声語深遠（二三一上）	梵声悟深遠
故我願往生（二三一上）	是故願往彼
讃仏諸功徳（二三一中）	讃諸仏功徳
功徳荘厳（二三一中）	荘厳功徳
利益他迴向行（二三三上）	迴向利益他行
一者清浄功徳成就（二三一中～下）	一者荘厳清浄功徳成就（以下、二者～十七者まで同様である）
観安楽世界見阿弥陀仏願生彼国土故（二三一中）	示現観安楽世界見阿弥陀如来願生彼国故
若善男子善女人修五念門成就者畢竟得生安楽国土見彼阿弥陀仏（二三一中）	若善男子善女人修五念門行成就畢竟得生安楽国土見彼阿弥陀仏
成就大悲心故（二三一中）	得成就大悲心故
観察彼仏国土功徳荘厳者（二三一中）	観察彼仏国土荘厳功徳成就者
略説彼阿弥陀仏国土荘厳十七種功徳（二三二上）	略説彼阿弥陀仏国土十七種功徳成就
二者身荘厳三者口荘厳四者心荘厳（二三二上）	二者荘厳身業功徳成就三者荘厳口業功徳成就四者荘厳心業功徳成就
与浄心菩薩無異浄心菩薩与上地諸菩薩畢竟同得寂滅平等故（二三二中）	与浄心菩薩与上地諸菩薩畢竟同得寂滅平等故
云何観菩薩功徳荘厳成就（二三二中）	云何観察菩薩荘厳功徳成就

三者彼於一切世界無余照諸仏会大衆無余広大無量供養恭敬讃歎諸仏如来（二三二中）	三者彼於一切世界無余照諸仏会大衆無余広大無量供養恭敬讃嘆諸仏如来功徳
又向説仏国土功徳荘厳成就（二三二中）	又向説観察荘厳仏土功徳成就
菩薩如是修五門行自利利他速得成就阿耨多羅三藐三菩提故（二三二中）	菩薩如是修五念門行自利利他速得成就阿耨多羅三藐三菩提故

以上のことから、『論』に比べて『論註』所引文の方が、字数が増えている傾向にあり、場合によっては、文意が異なる文も見られることが確認されよう。

また、ここでは煩雑になるので省略する（詳細については辻本〔一九九九〕を見よ。）が、改行箇所も大いに異なるのである。例えば、宋・東禅寺版、開元寺版などでは改行は一〇箇所であるが、宋・磧砂版、元・杭州版では、十九箇所もあり、高麗再雕版では、十三箇所である。さらに注目すべきは、曇鸞は『論』に註釈を施すにあたって、『論』の長行を「解義分」と称して、その内容を一〇節に分けてそれぞれに題名を付した。すなわち、願偈大意、起観生信、観察体相、浄入願心、善巧摂化、障菩提門、順菩提門、名義摂対、願事成就、利行満足である。改行というものは、当然のことながら無意味に行われるというものではなく、内容を理解し、次第順序を明らかにするために行われるのである。しかしながら、大蔵経所収の『論』改行箇所と曇鸞の「解義分」とは一致しないのである。つまり、曇鸞の内容理解が全く反映されていないことが分かるのである。改行箇所一つ採ってみても『論』と『論註』とは一線を画しているのである。

次に宋版と高麗再雕版「大蔵経」所収の『論』について主な字句の異同を示す。頁数は便宜的に大正大蔵経第二十六巻のものである。

（表②）

宋版	高麗再雕版
梵声悟深遠	梵声語深遠（二三一上）
我願皆往生	我皆願往生（二三一中）
無量寿修多羅章句以偈頌惣説竟	無量寿修多羅章句我以偈惣説竟（二三一中）
一者礼拝	一者礼拝門（以下、二者讃歎～五者廻向も同様）（二三一中）
云何礼拝身業礼拝阿弥陀仏如来応正遍知	云何礼拝身業礼拝阿弥陀如来応正遍知（二三一中）
於彼観察一切世間苦悩衆生同願生彼安楽国土願心所有功徳善根以巧方便廻向摂取衆生不捨一切世間故	不捨一切苦悩衆生心常作願廻向為首成就大悲心故（二三一中）
不可思議力故	成就不可思議力故（二三一中）
偈言仏慧明浄日除世痴冥闇故	偈言仏慧明浄日除世痴闇冥故（二三一下）
彼無量寿仏国土荘厳第一義諦妙境界相	彼無量寿仏土荘厳第一義諦妙境界（二三二上）
菩薩功徳荘厳成就	菩薩功徳成就（二三二中）
一者無染清浄心以不為自身求諸楽故	一者無染清浄心不以為自身求諸楽故（二三二下）
以讃歎阿弥陀仏随順名義称如来名依如来光明知相修行故得入大会衆数	以讃歎阿弥陀仏随順名義称如来名依如来光明想修行故得入大会衆数（二三三上）
以大慈悲観察一切苦悩衆生示応化身廻入生死園煩悩林中遊戯神通至教化地以本願力廻向故	以大慈悲観察一切苦悩衆生亦応化身廻入生死園煩悩林中遊戯神通至教化地以本願力廻向故（二三三上）
無量寿修多羅優波提舎偈略解義竟	（相応文なし）

このように『論』テキストは、『論』としての形態と『論註』に引用された『論』としての形態、そして、前者は宋版の入蔵されたものと、高麗再雕版入蔵されたそれとも大いに系統を異にしているのである。[3]

二、問題の所在

さて、梯信暁〔二〇〇八〕は、「曇鸞の『論註』は、智光（七〇九～七八〇頃）が、『無量寿経論釈』を著す際に下敷にしているので、奈良時代の南都では流布していたことが知られる。しかし比叡山には伝えられなかったようで、『九品往生義』や『往生要集』をはじめ十世紀の天台宗典籍には、智光の『無量寿経論釈』は用いられるが、曇鸞の『論註』への言及は全くない（二六〇頁）」とし、「『論註』は十世紀の比叡山には流布しておらず、源信はこれを見ていない。しかし『論註』に依拠して著された智光の『無量寿経論釈』は参照しているので、間接的に影響を受けていることは確かである」（一八九頁）とする。

しかしながら、筆者の研究〔二〇〇一〕からすると、『往生要集』の著者源信は、曇鸞『論註』そのものを見た可能性も残されており、比叡山にも『論註』が伝わっていた可能性は否定できないと考えられるのである。

確かに梯が指摘するように智光の『無量寿経論釈』は、『論』ではなくて、『論註』を参照したことは筆者の研究からも明らかである。[4] しかし、十世紀の天台宗典籍には曇鸞の『論註』への言及は全くない、とする根拠はどこにあるのだろうか。これについて論拠は示されていない。したがって、再考の余地があると考えられる。

本小論では平安時代における天台諸師が見た『論』テキストがどのようなものであったか、ということについて考察したい。平安時代における天台系浄土教の書物の中で、『論』[5]を引用した書物は次の四書である。[6] すなわち、

①　恵心僧都源信（九四二～一〇一七）『往生要集』（寛和元年（九八五）[7]）
②　宇治大納言源隆国（一〇〇四～一〇七七）編纂『安養集』十巻（延久三年（一〇七一）[8]）。
③　編者不明『安養抄』（西暦一一〇〇年前後・白河院政期[9]）。
④　編者不明『浄土厳飾抄』（十二世紀初め[10]）。

である。

源信、源隆国、『安養抄』の編者、『浄土厳飾抄』の編者がどの『論』テキストを実際に見ていたのかを判断するためには、当然のことながら彼らの生存年代よりも前に刻された、あるいは書写された『論』テキストと比較する必要がある。彼らの年代がおおよそ一〇世紀から一二世紀であるので、ここでは、房山雷音洞石刻本（隋末唐初）、『論註』所引の『論』、「古写本」（正倉院聖語蔵本、稲薗山長福寺「七寺一切経」、「金剛寺一切経[11]」）が該当するわけであるが、房山雷音洞石刻本については、この拓本などがこの当時日本にまで将来された形跡がないのでここでは省くことにする。よって、「古写本」と『論註』所引の『論』を主として検討を加えていくことにする。

三、『往生要集』に引用された『無量寿経論』

かつて稲城選恵〔一九七六〕は、「古来より七祖聖教本系と蔵経本系とあるようである。鸞師の論註は七祖教本系に、往生要集は蔵経本系」と指摘している（一三頁）。稲城の言うように確かに曇鸞『論註』は、七祖聖教本系（『註』所引の『論』）であることは筆者の研究からも首肯される[12]。しかし、蔵経本系については細かく分けると前述したように宋版や高麗版の系統では大きく文言の異なる箇所があり、一言では片づけられないのである。そこで、

『往生要集』に引用された『論』を字句の異同について再確認しておく。その目安となるのは次に挙げる三つである。

①『往生要集』巻上「故我願生彼　阿弥陀仏国（ゆえに私はかの阿弥陀仏の国に生まれることを願う」（大正八四巻四二中六行目）となっており、「古写本」では「故我願往生　阿弥陀仏国（ゆえに私は阿弥陀仏の国に往生すること願う）」とあり、『論註』や『論註』系のテキストでは、「是故願生彼　阿弥陀仏国（この故に、かの阿弥陀仏の国に生まれることを願う）」とある。ここでは、『往生要集』の文にはどちらにも一致していないが、「彼」の出入からすれば、『論註』そのものか『論註』所引の『論』テキストに近しいと言えよう。

②『往生要集』巻上「世親菩薩往生論云修五念門行成就畢竟得生安楽国土見彼阿弥陀仏」（大正八四巻四七下二五～二六行目）とあるが、『論註』・『論註』所引『論』では、「修五念門行成就者畢竟得生安楽国土見彼阿弥陀仏」となっている。「者」の出入の相違があるが、「五念門行」という点では、『論註』・『論註』所引の『論』を支持していると言えよう。

③『往生要集』巻上では、「一礼拝門　二讃歎門　三作願門　四観察門　五廻向門」（大正八四巻四七下二七～二八行目）となっている。[13]『論註』・『論註』所引『論』では、「一者礼拝門　二者讃歎門　三者作願門　四者観察門　五者廻向門」となっていて、『論註』・『論註』所引の『論』を支持している。

以上のことから、『往生要集』に引用されている『論』は蔵経本であるとする稲城の主張は誤りであることが判明し、むしろ源信は『論註』もしくは『論註』所引『論』を座右に置いて『往生要集』を著したと考えられるのである。すなわち、当時の比叡山には『論註』そのものか、『論註』所引の『論』テキスト、あるいはその両者が流布していたことを意味するのである。

四、『安養集』に引用された『無量寿経論』

次に『安養集』に引用された『論』本文を見てみよう。安養集が『論』を引用しているのは、次の四か所である。西村冏紹監修、梯信暁〔一九九三〕の凡例によると小文字は、脱字であり、誤字には〔　〕で正しい文字をつけたとする。また、（　）の字は削除される文字であるという。

① 無量寿論云。〔云〕何讃歎。〔口業讃歎。〕称彼如来名。如彼如来〔光〕明智相。如彼名義。欲如実修行相応故。（西村冏紹監修、梯信暁〔一九九三〕五六頁）

② 無量寿経論云。以一心専念作願生彼。修大者〔大者＝奢〕摩他寂静三昧行故。〔得〕入蓮華蔵世界（海）。是名入第三門。（西村冏紹監修、梯信暁〔一九九三〕三一一頁）

③ 無量〔寿〕論云。観察菩薩荘厳功徳成就者。観彼菩薩。有四種正修行功徳成就。応知。何者〔＝等〕為四乃至三者。彼於一切世界。無余照諸仏会。大衆無余。広大無量。供養恭敬。讃歎諸仏如来功徳。偈言雨天楽華衣。妙香等供養。讃歎佛功徳。無有分別心故。（西村冏紹監修、梯信暁〔一九九三〕三九七頁）

⑤ 無量寿論云。観察菩薩荘厳功徳成就者。観〔彼〕菩薩。有四種正修行功徳成就。応知。何者乃至二者。彼応化身。一切時不前不後。一心一念。放大光明。悉能遍至十方世界。教化衆生。（西村冏紹監修、梯信暁〔一九九三〕四四八頁）

これら『論』本文は果たしてどのテキストを指しているのだろうか。『論』そのものなのか、あるいは『論註』所引の『論』なのであろうか。

まず、①の文の中で、『安養集』が、どの『論』を引用したのかを計るバロメーターの役目を果たすのが、讃歎の「歎」という字である。

【安養集】無量寿論云。〔云〕何讃歎。

これを支持しているテキストは古写本である。これに対して、『論註』や『論註』所引の『論』は「云何讃嘆」となっている。

次に②の文であるが、蓮華蔵世界（海）である。すなわち、

【安養集】無量寿経論云。（中略）〔得〕入蓮華蔵世界（海）。

筆者は前述のように現在二三種もの『論』テキストを入手しているが、それらを照合してみると、これを支持しているテキストは皆無である。つまり、現存している『論』テキストには見当たらない語句なのである。また、この文は、智儼（六〇二年～六六八年）が『華厳経内章門等雑孔目』に、迦才（六四八年）が『浄土論』にそれぞれ同じ文を引用しているが、[14]『安養集』のように「入蓮華蔵世界（海）」とはなっておらず、いずれも「蓮華蔵世界」となっている。果たして源隆国が実際に見た『論』テキストは、本当に「海」の文字が入っていたのか、あるいは単なる書写誤り、衍字であったのだろうか、現在のところ残念ながらこの点を明らかにすることはできない。「界」という音に引きずられて「海」となったのではないかと推測できようが、いずれにせよ、「蓮華蔵世海」は明らかな誤りである。

また、③の文であるが、ここでは、「観察」「荘厳功徳」「何者」「諸仏如来功徳」「讃歎仏功徳」がどの『論』テキストであるのかを示唆する役割を果たす。

【安養集】無量〔寿〕論云。観察菩薩荘厳功徳成就者（中略）何者為四。（中略）讃歎諸仏如来功徳。（中略）讃歎

佛功徳無有分別心故。

まず、「観察」であるが、古写本は、「観察」ではなく「観」となっているのである。これに対して、『論註』や『論註』所引の『論』テキストは、「観察」となっているのである。次に「荘厳功徳」であるが、これも古写本は、「功徳荘厳」となっていて、「荘厳」と「功徳」の字句が入れ替わっているのである。これに対して『論註』や『論註』所引の『論』は、「荘厳功徳」となっており、これを支持している。また、「何者」についてもこれを支持しているのは、やはり『論註』や『論註』所引の『論』であり、古写本は、「何等」となっている。さらに、「諸仏如来功徳」であるが、これも古写本は、「諸仏如来」となっていて、「諸仏如来功徳」とはなっていないのである。これに対して『論註』や『論註』所引の『論』は、「諸仏如来功徳」となっており、これを支持している。最後に「讃歎仏功徳」であるが、古写本は、「讃仏諸功徳」となっていて、「讃歎仏功徳」とはなっていないのである。これに対して『論註』や『論註』所引の『論』は、「讃諸仏功徳」となっており、ここでは、『安養集』の「讃歎仏功徳」を支持するテキストは皆無である。

最後に④の文であるが、ここでは、「観察」「荘厳功徳」がどの『論』テキストを示唆する役割を果たす。

【安養集】無量寿論云。観察菩薩荘厳功徳成就者。

「観察」「荘厳功徳」については③の文で見た通り、『論註』や『論註』所引の『論』の系統がこれを支持しているのである。

以上、見てきたとおり、①では『論註』ではなく、古写本の系統であり、②ではどの系統をも支持していない。しかしながら、③と④の文では、『論註』所引の『論』であることが明白となった。

以上のように『安養集』は『論註』もしくは『論註』所引の『論』に、ある場合には一致するが、ある場合には

一致しない。したがって、源隆国が『安養集』を編纂する際、『論』テキストを誤写した可能性も否定できないが、源隆国が見た『論』テキストは「古写本」『論註』所引の『論』の両者の特徴を有するテキストであるとするにとどめておく。

五、『安養抄』に引用された『無量寿経論』

次に『安養抄』に引用された『論』本文を見てみよう。『安養抄』が『論』を引用しているのは、次の五か所である。

① 往生論云。清浄功徳成就者。偈言。観彼世界相。勝過三界道故。無量功徳成就者。偈言。究竟如虚空。広大無辺際故。性功徳成就者。偈言。正道大慈悲。出世善根生故。形相功徳成就者。偈言。浄光明満足。如鏡日月輪故。（大正八四巻一一九頁上～中）

② 無量寿経論云。以一心専念作願生彼。修奢摩他寂静三昧行故。得入蓮花蔵世界海。是名入第三門。（大正八四巻一二五頁上）

③ 往生論云天親観察彼仏国土功徳荘厳者有十七種〇一者清浄功徳成就云云観仏功徳荘厳成就者有八種〇一者座荘厳。二者身荘厳。三口荘厳。四者心荘厳云云何者座荘厳。偈言。無量大宝王。微妙浄花台故云云器世間清浄者。向説十七種仏功徳荘厳成就〇衆生世間清浄者。如向説八種仏功徳荘厳成就云云。（大正八四巻一三一頁中）

④ 往生論云。大乗善根界等。無譏嫌名。女人及根欠。二乗種不生。故浄土果報離二種譏嫌。一者体。二者名。体有三種。一者二乗人。二者女人。三者諸根不具人。無此三過故名離体譏嫌。名亦三種。非只無三体。乃至不

聞二乗女人諸根不具三種名。故名離名譏嫌。（大正八四巻一三六頁上）

⑥ 往生論云。菩薩巧方便迴向者。謂説礼仏等五種修行所集一切功徳善根。不求自身住持之。楽欲抜一切衆生苦故。作願摂取一切衆生共同生彼安楽仏国。是名菩薩巧方便迴向成就。菩薩如是善知迴向成就遠離三種菩提門相違法。何等三種。一者依智慧門。不求自楽遠離我心貪著自身故。二者依慈悲門。抜一切衆生苦速離無安衆生故。三者依方便門。憐愍一切衆生心遠離供養恭敬自身心故。是名遠離三種菩提門相違法。故菩提遠離如是三種菩提門相違法。得三種随順菩提門法時満足故。何故等三種。一者無染清浄心。以不為自身求楽故。二者安清浄心。以抜一切衆生苦故。三者楽清浄心。以令一切衆生得大菩提故。以摂取衆生生彼国土故。是名三種随順菩提門法満足。（大正八四巻一三九頁上～中）

この中で『安養抄』が『論』を参照していたのか、あるいは『論註』所引の『論』を参照していたのか、を示唆する字句について見ていこう。

まず①の文では、「清浄功徳成就者」「無量功徳成就者」「性功徳成就者」「形相功徳成就者」である。これを支持するのは「古写本」である。『論註』所引の『論』は、「荘厳清浄功徳成就者」となっているのである。「性功徳成就者」「形相功徳成就者」も同様である。『論註』所引の『論』は、「荘厳性功徳成就者」「荘厳功徳成就者」となっている。しかしながら、「無量功徳成就者」は少し事情が異なっている。すなわち、「無」の出入である。「古写本」などは「無量功徳成就者」となっているのである。

では、『論註』所引の『論』はどのようになっているかというと、「荘厳量功徳成就者」「荘厳無量功徳成就」となっているのである。したがって、ここで言えることは『安養抄』の編纂者が参考にした『論』は『論註』所引の『論』ではないということである。

次に②の文では「世界海」である。これは先に見た『安養集』でのところですでに述べたが、同じ誤りを踏襲しているので、『安養集』の孫引きの可能性も浮上してくる。これによって『安養抄』の編者は、『安養集』の編者源隆国が、参照した、同じ『論』テキストを見たのか、あるいは『安養集』を参照してこの部分を書き換えたのではないかと考えられるのである。

また、③の文では「功徳荘厳」「清浄功徳成就」「観仏功徳荘厳成就」「座荘厳」「身荘厳」「口荘厳」「心荘厳」「何者座荘厳」「仏国土功徳荘厳成就」「仏国土荘厳成就」がポイントになってくる。まず「功徳荘厳」であるが、これを支持するのは、『論註』所引の『論』以外すべてである。すなわち、『論註』所引の『論』は、「荘厳功徳」となっている。また、「清浄功徳成就」はすでに述べたように『論註』所引の『論』ではない。「観仏功徳荘厳成就」では、これを支持するのは古写本系であり、『論註』所引の『論』は、「観仏荘厳功徳成就」となっており、「功徳」と「荘厳」とが顚倒している。「座荘厳」「身荘厳」「口荘厳」「心荘厳」「何者座荘厳」も、それぞれ古写本系である。『論註』所引の『論』はそれぞれ「荘厳座功徳成就」「荘厳身業功徳成就」「荘厳口業功徳成就」「荘厳心業功徳成就」「何者荘厳座功徳成就」となっている。さらに「仏国土功徳荘厳成就」も古写本がこれを支持し、『論註』所引の『論』は、「仏国土荘厳功徳成就」となっており、ここでも「功徳」と「荘厳」の順序が入れ替わっているのである。「仏国土荘厳成就」も古写本テキストが支持しており、『論註』所引の『論』は、「荘厳仏土功徳成就」となっている。

次に④、⑤の文では字句の異同は全くないので、どのテキストを参照していたのかを示唆するものはない。

以上のことから『安養抄』の編纂者が見た『論』は、『論註』所引の『論』では決してなく、「古写本」を手に取って編纂したと考えられるのである。

六、『浄土厳飾抄』に引用された『無量寿経論』

次に『浄土厳飾抄』（一二世紀初め、作者未詳[15]）に引用された『論』本文を見てみよう。『浄土厳飾抄』が『論』を引用しているのは、次の六か所である。ただし、この書は漢訳テキストではなく、書き下し文である。

① 往生論には、彼の世界の相を観ずるに、三界道に勝過せり。究竟じて虚空の如し。広大にして辺際なし。（佐藤〔一九七九〕四四七頁下三～六行目）

② また往生論は、一心専念に願を作し、彼に生ぜんと。乃至、蓮華蔵世界海に入ることを得と。（佐藤〔一九七九〕四四七頁下八～一〇行目）

③ 往生論の若きは、花座は正報に属すなり。云々。取意所以は、彼の論にいわく
彼の仏国荘厳を観察するに十七種あり。云々。仏の功徳荘厳を観ずるに八種あり。一には座荘厳、二には身荘厳、三には口座荘厳、四には心荘厳。（佐藤〔一九七九〕四六三頁下一三～一七行目）

④ 往生論にいわく、大乗善根界などには等しく機嫌の名なし、女人及び根欠、二乗種生ぜず。（佐藤〔一九七九〕四七六頁下五～八行目）

⑤ 往生論にいわく、大乗善根界は等しく譏嫌の名なし。女人及び根欠二乗種生ぜず。（佐藤〔一九七九〕四七八頁下四～六行目）

⑥ 往生論には、極楽に生ずる菩薩は、三種の菩提門相違の法を遠離し、三種随順菩提門の法を満足す。（佐藤〔一九七九〕四九〇頁上一～三行目）

この中で『浄土厳飾抄』の編纂者が実際に見た『論』テキストがどの系統のものであったかを我々に示唆してくれるのは、②と③の文のみである。②の文については、前述したように『安養集』、『安養抄』にも引用されているが、『浄土厳飾抄』の編者も『安養集』か『安養抄』のどちらか、あるいはその両者を参照したことは明らかである。「座荘厳」「身荘厳」「口座荘厳」「心荘厳」については前述したとおり、古写本の特徴を有している。『論註』所引の『論』はそれぞれ「荘厳座功徳成就」「荘厳身業功徳成就」「荘厳口業功徳成就」「荘厳心業功徳成就」となっている。

ということは、『浄土厳飾抄』の編纂者は『論註』所引の『論』ではなく、古写本テキストを参照していた証左となろう。

七、結論

以上、考察してきたことをまとめると、次のことが言えるのではないか。

①『往生要集』に引用された『論』は『論註』もしくは『論註』所引の『論』系統の特徴を強く有するテキストである。

②『安養集』に引用された『論』は、「古写本」、『論註』所引の『論』の両者の特徴を有するテキストである。

③『安養抄』に引用された『論』テキストは「古写本」系であって、『安養抄』の編者が『論註』あるいは『論註』所引の『論』をみた形跡は全くない。すなわち、源信や源隆国が参照した『論』テキストとは異なるテキストを見たということである。ただし、『安養集』も座右において編纂したことは明らかである。

④『浄土厳飾抄』に引用された『論』テキストは「古写本」系であって、『安養抄』の編者同様『論註』あるいは『論註』所引の『論』をみた形跡は全くないことが明らかとなったのである。『浄土厳飾抄』の編者は、「世界海」という明らかな誤りを踏襲しているので『安養集』か『安養抄』のいずれか、あるいはその両者を参照したことは明らかである。

⑤梯は比叡山には曇鸞『論註』が流布していないと指摘した。本小論からも『論註』そのものの引用文は確認できなかった。しかし、源信が『論註』所引の『論』を参照したことが明らかであるので、当時の比叡山には『論註』が存在していたとは言えないが、少なくとも『論註』所引の『論』テキストが流布していたことになる。

⑥源信、あるいは、源隆国が参照した『論』、『安養抄』『浄土厳飾抄』の編者が参照したそれとはそれぞれ異なる『論』テキストを見ていたのである。したがって、当時の比叡山には少なくとも二種類の『論』テキストが存在していたことになろう。

（表③）

源信『往生要集』	『論註』所引の『論』の特徴を強く有する。
源隆国『安養集』	「古写本」、『論註』所引の『論』の両者の特徴を有している。
編者不明『安養抄』	「古写本」の字句の異同と一致する。
編者不明『浄土厳飾抄』	「古写本」の字句の異同と一致する。

以上、検討したように平安時代の比叡山における『論』テキストの流伝が確認することができたのである。

註

（1）菩提流支による『論』訳出年代についてはそもそも二説ある。すなわち、西暦五二九年説と西暦五三一年説とである。筆者は、菩提流支によって二度漢訳されたと考えている。これに関しては辻本〔二〇一一〕を見よ。

（2）辻本〔一九九九〕を見よ。

（3）『論』テキスト系統を大別すると『論』そのものと『論註』所引の『論』、すなわち、前者をA系統、B系統、D系統とし、後者をC系統とする、三系統である。それをさらに細別すると次のようになる。

A①宋・東禅寺版、宋・開元寺版、房山雷音洞石刻本

A②宋・思渓版

A③宋・磧砂版、元・杭州版、明・洪武南蔵

A④明・永楽北蔵、明・嘉興蔵、清・龍蔵

B①高麗・再雕版、房山雲居寺石刻本、中華大蔵経、大正蔵経

B②大日本校訂大蔵経、中華民国・頻伽蔵

C　親鸞加点本『論註』所引『論』、京都常楽寺所蔵存覚書写本、浄土宗全書、浄土真宗聖典七祖篇（原典版）、真宗聖教全書

D（古写本）系　正倉院聖語蔵本、稲薗山長福寺「七寺一切経」、「金剛寺一切経」

これに関しての詳細については、辻本〔一九九九〕、〔二〇〇六〕、〔二〇一四〕を見よ。

（4）辻本〔一九九九〕。

（5）『論』の題名については辻本〔二〇一〇〕を見よ。

(6) これらの四書については佐藤〔一九七九〕二一八～二五八頁に詳細な研究がある。

(7) 『往生要集』に引用された『論』に関してすでに検討し、その成果を発表した。辻本〔二〇〇一〕。

(8) この書に関しては、西村・梯〔一九九三〕に翻刻と詳細な研究がある。また、恵谷〔一九七六〕にもこの書の研究がある（一七一～一八九頁）。梯〔二〇〇八〕は、「『安養集』は、『往生要集』の影響下に成立した天台宗の浄土教典籍である。ところが当時の比叡山には流布しなかった文献がいくつか引用されている。（中略）元暁のものと伝わる『遊心安楽道』（中略）などがそれである」（二五九頁）とする。すなわち、梯は比叡山には『遊心安楽道』は伝わっていなかったとするが、落合俊典〔一九八〇〕〔一九八八〕〔一九八九〕は、叡山僧撰述説を採るので、両者の見解は異なる。これらに対して愛宕〔二〇〇六〕は、東大寺華厳宗僧智憬撰述説を主張する。筆者の研究〔二〇〇七〕では、『遊心安楽道』に引用されている『論』を手掛かりとして調査したが、そこでは古写本や大蔵経などに見られる『論』ではなくて、曇鸞『論註』か、あるいは『論註』に引用された『論』テキストの系統であることが判明した。

(9) 大正大蔵経八四巻一一九～一九二頁。

(10) 佐藤〔一九七九〕三五五～五二五頁に西村冏紹のテキスト解説があり、テキストの影印、翻刻がある。

(11) 落合〔二〇〇九〕によれば、「日本の古写経の中、平安写経の大半は奈良写経の転写本を底本として書写されている」とする。

(12) 辻本〔一九九九〕を見よ。

(13) 宋版（東禅寺版、開元寺版、思渓版）では、「一礼拝　二讃歎　三作願　四観察　五迴向」となっている。

(14) 前者が大正四五巻五七七下十一～五七八上六、後者が大正四七巻九四下九～九五上二。

(15) 『浄土厳飾抄』のテキスト書誌情報については、佐藤〔一九七九〕を参照のこと。そこには西村冏紹が、このテキ

ストの基本的情報を報告している。また、佛教大学総合研究所〔二〇一一〕『浄土教典籍目録』には残念ながらこの書の項目は見当たらない。また、佐藤〔一九七九〕は、「『浄土厳飾抄』は（中略）『安養抄』にあつめられた資料を活用しつつ、論義の用意のために自己の見解をとりまとめている」（二五三頁）とする。

参考文献

愛宕邦康〔二〇〇六〕日本仏教史研究叢書『『遊心安楽道』と日本仏教』法蔵館

石田瑞麿〔一九九二〕「空也・良源・源信・良忍―叡山の浄土教―」『浄土仏教の思想』第六巻　講談社

稲城選恵〔一九七六〕『浄土論序説』百華苑

井上光貞〔二〇〇一〕『新訂日本浄土教成立史の研究』山川出版社

恵谷隆戒〔一九七六〕『浄土教の新研究』山喜房仏書林

大野達ノ助〔一九七二〕『上代の浄土教』吉川弘文館

落合俊典〔一九八〇〕「遊心安楽道の著者」華頂短期大学『研究紀要』第二五号

落合俊典〔一九八八〕「遊心安楽道諸本攷」華頂短期大学『研究紀要』第三三号

落合俊典〔一九八九〕「『遊心安楽道』の諸本について」『仏教論叢』第三三号

落合俊典〔二〇〇九〕「敦煌の仏典と奈良平安写経―分類学考察―」高田時雄編『漢字文化三千年』臨川書店

梯信暁〔二〇〇八〕『奈良・平安期浄土教展開論』法蔵館

梯信暁〔二〇一二〕『インド・中国・朝鮮・日本浄土教思想史』法蔵館

佐藤哲英〔一九七九〕『叡山浄土教の研究』百華苑

塚本善隆〔一九三五〕「石経山雲居寺と石刻大蔵経」『東方学報』京都第五冊副刊　東方文化学院京都研究所
辻本俊郎〔一九九九〕「『無量寿経論』テキスト考」『無量寿経論校異』佛教大学総合研究所
辻本俊郎〔二〇〇一〕「『往生要集』に引用される『無量寿経論』について」『印度学仏教学研究』第五〇巻第一号
辻本俊郎〔二〇〇四〕「『無量寿経論』テキスト考（その2）―明版・清版を中心として―」『アジア文化学科年報』第七号
辻本俊郎〔二〇〇六〕「『無量寿経論』の諸本について」『アジア文化学科年報』第九号
辻本俊郎〔二〇〇七〕「『遊心安楽道』の著者について―『無量寿経論』を手がかりとして―」『アジア学科年報』第一号
辻本俊郎〔二〇一〇〕「世親『無量寿経論』の題名をめぐって」『東アジア研究』第五四号
辻本俊郎〔二〇一一〕「『無量寿経論』と Bodhiruci」『アジア学科年報』第四号
西村冏紹監修、梯信暁〔一九九三〕『宇治大納言源隆國編安養集本文と研究』百華苑
佛教大学総合研究所〔二〇一一〕『浄土教典籍目録』佛教大学総合研究所